

＜調査研究シリーズ 118＞

世代間交流の教育的意義に関する研究の動向と課題

吉 津 晶 子*
溝 邊 和 成**

1. はじめに

本論は、近年注目されている世代間交流に関する教育的意義について、その研究動向を整理・検討するとともに、実践および研究上の課題を明らかにするものである。特に 1960 年代以降の世代間交流に関する日米を中心とした先行研究を俯瞰し、その教育的意義についての考察を行うことを目的としている。

世代間交流とは、「二世代間の協力、相互作用または交流を促進するプログラム（アメリカ：全国エイジング協議会，1985）⁽¹⁾」，「高齢者と青少年の間で互いの能力や知識を意図的・継続的に交換しあう社会的媒体（オランダ：国際世代間交流プログラム協会，2002）⁽²⁾」と定義されている。日本においては、「子ども，青年，中年世代，高齢者がお互いに自分たちの持っている知恵や英知，経験や技術などを出し合って，自分自身の人間的発達・向上と，自分の周りの人々や社会に役立つような健全な地域づくりを実践する活動で，一人ひとりが活動の主役になることである（草野，2010）⁽³⁾」と定義されている。つまり世代間交流とは，世代の間に存在する意図的・継続的な活動であると考えられる。近年，二世代間だけにとどまらず，広く多世代を対象とした世代間交流についての認識も広がりを見せ，三世代交流・四世代交流についての知見が生涯発達の視点から報告されるようになってきている（例えば，金田，2009）⁽⁴⁾。

この世代間交流については，現行の小学校学習指導要領（2008）⁽⁵⁾にも示されているように，高齢者との交流機会を設け，感謝と尊敬の気持ちや思いやりの心をはぐくみ，高齢者から生きた知識や人間としての生き方を学ぶことがすすめられている（第1章第4の2（12））。同様に，幼稚園教育要領（2008）⁽⁶⁾第2章「人間関係」，保育所保育指針（2008）⁽⁷⁾第3章「保育の内容」においても高齢者とのかかわりがすすめられている。しかしながら，世代間交流の実践報告や事例研究に関しては，世代間交流

* 熊本学園大

** 兵庫教育大学大学院

が行われている環境という視点から複合施設における建築類型（浅沼，2002）⁽⁸⁾，世代間交流の内容を分類・整理する枠組（君島，2001）⁽⁹⁾，世代間交流を支援する視点からの分類（吉津，2009）⁽¹⁰⁾等が見られるが，教育的意義に関する総括的議論は挙げられてこなかった。また，外国の先行研究についても世代間交流の実践的成果から教育的意義の整理が十分になされていないのが現状である。

そこで，本論では，まず世代間交流活動を成立させるプログラムに関する日米の歴史的背景を述べ，次に世代間交流のプログラム内容および実施実態を分類・整理する。その際，New York State Intergenerational Network (NYSIgN)¹⁾の世代間交流プログラム類型⁽¹¹⁾による“Elders Serving Youth”，“Youth Serving Elders”，“Joint/ Shared Programs”を用いる。“Elders Serving Youth”では，「高齢者が若者を支援する」タイプの世代間交流，“Youth Serving Elders”と“Joint/ Shared Programs”は，「子どもや学生主体」の交流プログラムと「子どもと高齢者相互主体」となる活動例である。

2. 日米における世代間交流プログラムの変遷

2.1 米国の世代間交流プログラム

1960年代の半ば，米国では gerontologists（老年学者），心理学者，教育者，人間発達論の研究者らが世代間交流の必要性を指摘するようになった（Newman，1989）⁽¹²⁾。その背景には，少子高齢化と核家族化，都市部への人口の集中などによる結果として，高齢者と若い世代の交流断絶に起因するエイジズム²⁾や高齢者の孤独化現象や疾病問題があった。これらに対し，Newman，S.（1977）⁽¹³⁾（1995）⁽¹⁴⁾は，世代間交流プログラム“Intergenerational Program”という意図的なプログラムによる世代間への介入とその必要性を唱えた。

世代間への介入政策の中で，最も初期のものが「里親祖父母プログラム：Foster Grandparent Program（以下，FGP）」である。1963年にCommunity Action Projectの一環として設立された初期のFGPは低所得高齢者の能力開発を目的としたものであったが，1965年以降はvolunteer ACTION networkに加わり，プログラムが本格化した（Newman，1989）⁽¹⁵⁾。このプログラムでは，60歳以上のシニア世代が，有償にて週5日，約20時間，家庭的に恵まれない子どもを対象に祖父母のような役割を果たすも

1) New York State Intergenerational Network (NYSIgN) は，ニューヨーク州の地域ネットワークをサポートし，世代間交流プログラムの開発，研修，情報収集等を行うと共に，公共政策への提言を行う NPO 団体である。本論で用いる世代間交流プログラムの類型は，NYSIgN 監修のもと，New York City Department for the Aging から発行された Good Practices in Intergenerational Programming を一部援用している。

http://pages.stern.nyu.edu/~kbrabazo/NYSIgN_Web_Site/（2016年4月参照）

2) 年齢による差別をさす。特に高齢者に対して行われる年齢差別をいう。

のであった。このプログラムは、現在も55歳以上の高齢者によって、週15-40時間というかたちで発展的に継続されており、子どもの読み書きに対する個別指導や問題を抱えたティーンエイジャーのメンタリング、障害を持つ未熟児や子どもの世話、被虐待児へのケアを目的に、世代間交流が行われている（National & Community Service, 2008）⁽¹⁶⁾。また、FGPが高齢者にもたらす効果についての研究（高齢者の知能等に関する縦断研究：Detroit Study）では、参加高齢者に対して心身共にポジティブな効果が報告されている（Saltz, 1989）⁽¹⁷⁾。

1969年には「退職シニアボランティアプログラム：Retired Senior Volunteer Program（以下、RSVP）」と「国立サービスラーニングセンター：National Center for Service-Learning」が設立された。現在、前者は米国最大のボランティアネットワークの一つとして発展し、コミュニティにおけるさまざまなボランティア活動が無償で行うとともに、若者への支援や指導を行っている（National & Community Service, 2008）⁽¹⁸⁾。後者は、学生によるボランティアとサービス・ラーニング・プログラム³⁾として設立され、高齢者へのボランティアと地域におけるサービス・ラーニング・プログラムの開発普及を目的としている。設立当初は約50の大学から、看護、社会福祉、リハビリテーションなどの分野の学生が参加していた。主な活動は、学生たちがコミュニティ内の高齢者を毎週訪問し、高齢者との交流を通して地域社会を学ぶものであった。このプログラムは1982年に規模が縮小されたが、それ以降も学生と地域の高齢者間の相互作用の機会を提供し続けている（Newman, 1989）⁽¹⁹⁾。

2.2 日本の世代間交流プログラム

1960年代、日本においても米国と同様に、核家族化、都市部への人口集中という社会的背景による地域のつながりの希薄化についての議論が世代間の断絶という視点で語られ出した（例えば、岡本, 1968）⁽²⁰⁾。この時期に行われた世代間交流の事例がエイジング総合研究センター（1994）⁽²¹⁾によって明らかにされており、世代間交流の調査資料としては現在のところ最も古いものである。

その調査の対象は、1969年に開始された鳥根県隠岐海士町（あまちょう）の「老人会の世代間交流事業」である。またその内容は、海士町老人クラブ会員を主とした高齢者と小学校、保育所の子どもたちが、さまざまな行事やイベントを通じて交流を深めるというものである。交流の目的は高齢者から子どもへの文化伝承であり、具体的には、季節の行事や注連縄作り、竹細工作り等が行われている。このような世代間交流の形態は、現在も見られる世代間交流の代表的な形であるといえる。

また、最近の学校教育の現場では、2008年より学校支援地域本部事業（文部科学

3) 体験学習（experiential education）と地域における奉仕活動とを結びつけた総合的な学習活動のプログラム。

省)がスタートし、「学校支援ボランティア事業」によって学校・家庭・地域の連携協力のもとに子どもを育てる体制がとられてきた(村山, 2010)⁽²²⁾。このような背景のもと、シニアボランティアによる学校内でのボランティア活動を通して、世代間交流が図られているという報告もされている(角間・草野, 2012)⁽²³⁾。

一方、1980年代後半以降、福祉の現場では、幼老複合施設⁴⁾における世代間交流が各地で見られるようになり(例えば江東園, くわなの宿)⁽²⁴⁾、保育所と高齢者施設、学童保育と高齢者施設というように生活の場を共有する形の世代間交流が見られるようになった。近年は、国による地域共生型サービスの推進により、地域福祉としての世代間交流のあり方が議論・検討されている(厚生労働省, 2013)⁽²⁵⁾。

3. Elders Serving Youth

3.1 高齢者主体のプログラムとその研究動向

高齢者が若者を支援するという世代間交流プログラムでは、前述した FGP や RSVP に始まり、40年以上の学校支援ボランティアやヘッド・スタート等の活動の中で一定の評価を得ている(National & Community Service, 1994)⁽²⁶⁾(Teh & Terry, 2008)⁽²⁷⁾。ここでは、高齢者主体のプログラムとその研究動向として、学校支援ボランティアに焦点をあて、事例研究を取り上げて概観する。

3.2 Experience Corps (現 AARP Experience Corps)

Glass (2004)⁽²⁸⁾らによると、1993年から1995年にかけて高齢者の学校支援ボランティアの新たなプログラムがエリクソンの発達課題(generativity)⁵⁾をベースにFried, L.& Freedman, M.によって設計され、その後FGPとRSVPの協力のもとパイロット・プロジェクトを実施、1997年より本格始動を始めた非営利の団体組織がExperience Corps (2011年よりAARP Experience Corps⁶⁾)である。主な活動内容は、読み書きを苦手とする小学生を中心に、識字教育、読書教育を教室内で行うことと、メンターとしての役割を負うことである(写真1)。これらの活動は、子どもの学力向上と高齢者のヘルス・プロモーション⁷⁾を目的として実施されている。

4) 「保育所やデイサービス、特別養護老人ホーム」等の子どもと高齢者が同じ敷地や建物内で生活できるような環境下にある施設をさす。

5) generativity は「世代性・次代育成能力」と訳され、Erikson (1963)⁽⁵⁹⁾「次世代を確立させて導くことへの関心」と定義し、Erikson & Erikson (1998)⁽⁶⁰⁾によって「自分自身の更なる同一性の開発にかかわる一種の自己-生殖も含めて新しい存在や新しい制作物や新しい概念を生み出すこと」と再定義された概念である。

6) AARP Experience Corps

<http://www.aarp.org/experience-corps/> (2016年4月参照)

7) WHO (世界保健機関) が1986年のオタワ憲章において提唱した新しい健康観に基づく21世紀の



写真 1 : Abigail Vare Elementary School in Philadelphia Pennsylvania

子どもの学力向上に関する研究 (Rebok, et al, 2004)⁽²⁹⁾ では、ボルチモア（メリーランド州）におけるプログラムにおいて K から 3grade の 1194 名の子どもの対象に調査が行われた。結果は、3grade の生徒において、標準化された読み取りテストのスコアが有意に高いことが示された。また、学力以外にも教室内における破壊的な行動を減少させたとの報告がある。これらの結果から、高齢者が教室に入り学習支援を行うことと交流をもつことが、子どもの学力向上のみならず、学習環境の適正化に寄与したということがうかがえる。このような子どもへの好影響のほか、参加する高齢者のもつ社会への貢献意欲の充足、生産的な役割についての報告 (Glass, et al., 2004)⁽³⁰⁾ から、Experience Corps のプログラムによって、高齢者の社会的可能性の広がりが示されているといえよう。

3.3 REPRINTS (Research of Productivity by Intergenerational Sympathy : りぷりんと)

Experience Corps をモデルとし、2004 年に日本への応用を試みた研究事例が REPRINTS である (藤原, 2009)⁽³¹⁾。プログラムの基本コンセプトは、高齢者による世代間交流を通じた「社会貢献」「生涯学習」「グループ活動」で、活動内容は子どもへの絵本の読み聞かせである。参加者は 60 歳以上の公募による高齢者で、ボランティア養成セミナーを修了後、地域の公立小学校、幼稚園、児童館へ定期的に訪問し、交流を行った。

健康戦略で、「人々が自らの健康とその決定要因をコントロールし、改善することができるようにするプロセス」と定義されている。

交流の結果、児童の高齢者観が交流頻度の高い児童では1年後も肯定的なイメージを維持することの示唆（藤原ら，2007）⁽³²⁾、児童の心身におけるストレス症状の緩和（竹内ら，2012）⁽³³⁾、児童へのソーシャル・サポートを提供する可能性（安永ら，2011）⁽³⁴⁾ についての結果が得られている。高齢者にとっての効果として、自身の健康度自己評価や握力など心身の健康度が1～2年後も維持・向上すること（Fujiwara, Y. et al., 2009）⁽³⁵⁾ が報告されている。また、REPRINTS 活動を通して、その活動評価が児童を通して保護者にも伝わり、高齢者と保護者世代にまたがる三世代の信頼感構築に寄与する可能性も示された（藤原ほか，2010）⁽³⁶⁾。

4. Youth Serving Elders

4.1 子ども、学生主体のプログラムとその研究動向

子どもや学生が高齢者を支援するという世代間交流プログラムは、前述した「国立サービスラーニングセンター：National Center for Service-Learning」をはじめとして、テンプル大学世代間センターによる Project SHINE⁸⁾、コロンビア大学の大学院生や卒業生によって設立された DOROT⁹⁾ などが代表的である。ここでは若者を主体としたプログラムとその研究動向として、高齢者の生活支援ボランティアに焦点をあて、事例研究を取り上げて概観する。

4.2 Project SHINE

1979年、Henkin, N.（創設者兼センター長）によって設立された Intergenerational Center at Temple University（テンプル大学世代間交流センター）のプログラムの一つである。このプログラムは、移民や難民問題に伴う異文化、異世代のコミュニティにおける諸課題に対するブリッジ機能を支援することを目的としている。主な活動は、学生が移民高齢者に英語や米国の歴史を教え、市民権獲得のサポートを行うことで、多様なコミュニティ内の異文化や世代間の理解を促している（JIUA&PSU, 2009）⁽³⁷⁾（写真2）。1997年以降、本プログラムは全米16都市で200以上のコミュニティと連携し、31の大学、1000以上のコースがSHINEを通じてサービス・ラーニングを取り入れ、これまでに約1万人以上の学生が参加したとされている。

プログラムによる交流の成果として、高齢者に対しては、社会的孤立感の解消、新しい文化に対する理解と言語スキルの獲得が示され、学生に対しては高齢者に対する

8) Project SHINE

<http://projectshine.org>（2016年4月参照）

9) DOROT

http://www.dorotusa.org/site/PageServer?pagename=homepage_DOROT（2016年4月参照）



写真2：“Coffee Cup” in Philadelphia; Project SHINE
中国移民の高齢者に対する語学支援および交流のカフェ

理解と高齢者の生きてきた時代や歴史を知る機会、共感のスキル獲得が示された (Yoshida, H., Henkin, N., et al., 2013)⁽³⁸⁾。

4.3 DOROT

DOROTとは、ヘブライ語で“諸世代”を意味しており、全ての世代を指す言葉である。世代間の支援“Generations helping Generations”を主旨としたプログラムを多数展開しているNPO組織である。コア・プログラムとして、Friendly Visiting（高齢者宅への訪問）、Holiday Package Deliveries（祝祭日用プレゼントの宅配）、Kosher Meals for the Homebound（孤立している高齢者へユダヤ食材の宅配）、Shop and Escort（買い物のエスコート）、Homelessness Prevention Program（ホームレス予防プログラム）等がある。プログラム参加者は、DOROTと提携している156の学校（公立、私立）の生徒、学生が中心である（写真3）。

プログラムによる交流の結果として、高齢者にとっては、日常的な家事等の支援を受けることができる、これまでの人生の振り返りと人生経験を若者と共有することができる、若者に（民族的）価値観を伝えることができる等が示された。また生徒・学生にとっては、高齢化や孤立によって生じる課題の理解、コミュニティサービスに関



写真3：DOROT建物内にあるホールでの世代間アートプログラム

する単位の取得、NPOに関する学び、コミュニケーションおよび社会的スキルの獲得等が結果として示された(NYSIgN, 2010)⁽³⁹⁾。

5. Joint/ Shared Programs

5.1 相互主体のプログラムとその研究動向

日本において、幼児と高齢者、児童と高齢者等の相互に影響し合うプログラムについては、前述した1980年代後半より福祉領域で事例が散見されるようになってきている。ここでは、相互主体のプログラムとその研究動向として、幼老複合施設での交流に焦点をあて、事例研究を取り上げて概観する。

5.2 江東園

1976年、社会福祉法人江東園(東京都江戸川区)によって養護老人ホームの同一敷地内に江戸川保育園が開所され、幼老統合ケア¹⁰⁾が始まった。高度経済の発展により、働く母親の増加、核家族世帯の増加の中で、保育所のニーズが高まったことがその背景となっている。1987年、江東園は創立25周年を機に老朽化した建物の全面改築し、特別養護老人ホーム・高齢者住宅サービスセンター、既存の養護老人ホーム・保育所の4施設合築の幼老複合施設として新たな出発をした(杉, 2010)⁽⁴⁰⁾。江東園は世代間交流を「施設を一つの社会・大家族として考え、スタッフ、保護者を含む三世帯・四世代が一家団欒の生活を作り出すこと(杉, 2004)⁽⁴¹⁾」と捉え、施設の運営方針としている。

杉(2004)⁽⁴²⁾によれば、次のようにまとめられている。交流内容については、日課としてのプログラム(朝の挨拶・ラジオ体操等)、年中行事としてのプログラム(季節の行事等)、共同作業プログラム(畑での作物作り、芋掘り等)、伝統継承プログラム(舞踊・茶道・お手玉作り等)がある。

交流の効果として、高齢者に対しては、生活リズムが活性化されたこと、一緒に食事をするという「食」を中心とした交流に大きな可能性が見られたこと、「教える・伝える」という活動を通して役割感や有用感が芽生えたことが挙げられている。また園児に対しての効果としては、昔遊びや技能を学ぶこと、高齢者の存在を自然に受け止めること等が示されている。園児に対する効果に関しては、中学生から大学生までを対象とした「卒園児追跡調査」が行われ、園児時代の交流の思い出と共に、目上の

10) 幼老統合ケアとは、高齢者福祉と子育てをつなぐケアの実践と相乗効果について検討する幼老統合ケア研究会の発足によって用語の整理がなされたものである。一番ヶ瀬(2006)⁽⁶¹⁾によって「人類が本来もっていた当然のあり方で、ぬくもりのある共存社会の実現と、そこで文化の継承、それを通じての創造を改めて取り戻すための方法である」と定義づけられている。

人に対する接し方や仕草が自然であるといったコミュニケーション能力に関する効果も報告されている。

5.3 ひかりの里

2001年、ウェルネスグループ（三重県桑名市）によって、グループホーム¹¹⁾と学童保育の合築施設として開設され、当初より幼老統合ケアを実践している。グループホームに学童保育専用室を併設、中庭を共有できるようにし、日常的に交流できてなじみの関係が子どもと高齢者間に築けるように環境を整えている。

交流の内容については、高齢者と児童の交流の「しかけ（計画交流）」によって、かまどでのご飯炊き、農園（中庭）での野菜作り、食事を共同で作り食する、散歩、年中行事等が用意されている。その他に児童の宿題、学習を一緒にすることもプログラムに入っており、学習やしつけ等には少人数で落ち着いて行えるような習慣づけを促している（多湖，2010）⁽⁴³⁾。

交流の効果として、認知症によって自信を失っていた高齢者の自信回復につながる事が報告されている。認知症の特徴として、繰り返し（行動障害・認知障害）や感情のコントロールの難しさ等が指摘されるが、これらを正の行動として捉え、子どもとの交流に生かしている。具体的には、宿題や学習の場面で繰り返し続けることができる、喜怒哀楽（感情）が直接的に出ることによって、子どもたちに伝わりやすい等である。また、若い頃の経験に関しては認知症の影響を大きく受けないため、子どもに教える・伝えるといったことが自然に行える結果、不安感の軽減・自信の回復へとつながったと考えられている（多湖，2003）⁽⁴⁴⁾。児童に対する効果としては、高齢者と生活を共にすることによって、食事時の行儀・挨拶等という生活の規範を学ぶこと、高齢者に対する気遣いが増えたことが報告されている（多湖，2006）⁽⁴⁵⁾。

5.4 Seagull School

Seagull Schoolは、1971年に設立されたNPO法人によって1972年に開設されたプレ・スクール（Kailua, Hawaii）に始まる（Larson, 1994）⁽⁴⁶⁾。現在はオアフ島に5つ、ハワイ島に1つの学校を有し、900名の子どもたちが学んでいる。その中でも1995年に開設されたSeagull School Kapolei校¹²⁾（子ども240名、高齢者50名）は、プレ・スクールと高齢者のデイケアセンターを敷地内に併設しているという特徴を持っている。Kapolei校における高齢者には2通りあり、教員をサポートするシニアアシスタント（クラス別配置）とデイケアセンターに通所する高齢者（認知症、障害等）である。

11) ここでは認知症グループホームをさす。認知症の状態にある要介護高齢者が入所する小規模施設である。

この両者とも子どもとの交流を行っているが、デイケアセンター利用者に関しては、心身の状況によって交流が可能であればクラス内に配置されている。

子ども (Keiki) と高齢者 (Kupuna) が個人的な関係を構築できるように、偶発的・計画的な交流が計画され、両者の視覚的および物理的な接触が可能となるような環境が整えられている (Mendelson, et al., 2011)⁽⁴⁷⁾。

交流の内容については、造形やぬりえ、外遊び、パズル／テーブルゲーム等で、ここでは高齢者が子どもに対して指導的立場に立つということに固守せず、子どもと同じ立場での参加が促されているのが特徴である (溝邊ほか, 2011)⁽⁴⁸⁾ (写真4)。

交流の効果として、高齢者にとっては加齢によって疎遠となってしまった孫世代と一緒にいることにより孤独感が薄れること (Mendelson, et al., 2011)⁽⁴⁹⁾、子どもにとっては、人は異なる能力を持っているということを知り、お互いに思いやる気持ちを学ぶことできる (溝邊ほか, 2011)⁽⁵⁰⁾ということが報告されている。

6. 教育的意義についての考察

6.1 日米の歴史的取り組みからの考察

日米の世代間交流プログラムの史的取り組みから導出されたのは、「世代間交流プログラム」という意図的に世代を結びつける試みが、日米ほぼ同時期に行われるようになったということである。ただし、日本と米国の社会的事情を比べると、それに求



写真4 : Seagull School 子どもと高齢者 (デイケア利用者) が同じ活動 (パズル) を行う様子

12) Seagull School

<http://www.seagullschools.com/home> (2016年4月参照)

められたニーズの違いに行き着く。

米国の場合は、低所得高齢者の能力開発から始まり、その能力を若い世代に移譲することによって対価を得られることと同時に、社会参加への道が開かれたことである。同時に、ケアの受け手としての高齢者の立場からは、地域の若者の参画によって、交流とさまざまな支援を受けることができるという地域福祉のあり方が世代間交流プログラムを通して形づくられていったことがうかがわれる。一方、日本の場合は、世代間の断絶を防ぐための方策として、文化継承という形での世代間交流プログラムが高齢者参画と地域コミュニティの再生を目的として形づくられてきたことがうかがわれる。このことは近年の学校支援ボランティアにも通じ、地域福祉というよりも、地域の教育力補完という意味合いが考えられる。

6.2 3つの世代間交流プログラム類型からの考察

世代間交流プログラムの類型として、“Elders Serving Youth”，“Youth Serving Elders”，“Joint/ Shared Programs”を用いて、日米の事例を概観してきた。これら3つのプログラム類型に共通するのは、プログラムの主体者、非主体者にかかわらず、世代間交流プログラムを通して何らかのベネフィットを得ているということである。

米国の高齢者の場合は、有償ボランティアとして、僅かながらでも所得が発生するという現実的な利益が生じている。また、Experience Corpsの事例のように、プログラム設計段階から高齢者の生きてきた経験を若い世代に伝えていく「世代性（generativity）」に焦点をあて、社会への貢献意欲の充足という自己実現の機会を世代間交流プログラムは提供している。この傾向は日本の高齢者も同様に見られ、REPRINTSによる高齢者の健康指標の維持・向上の研究報告によって裏付けられている。

子どもや学生に対しては、高齢者と交流することによって、高齢者の生きてきた歴史や経験を学べるということと、高齢者理解の深化についてが、全ての事例に共通している。また、Experience Corpsの事例に見られるように、高齢者が教室に入り学習支援を行うことによって、個別の学習支援のみならず、クラス全体の学習環境の適正化に寄与したという報告から、高齢者の存在が＜教育環境＞としての役割を担う可能性が示されていることに、世代間交流における教育的意義の一つを見いだすことができると考える。教室内の高齢者の存在について、ポストロム（2012）⁽⁵¹⁾も同様に、スウェーデンの「クラスのおじいちゃんプロジェクト」を例にあげ、高齢者を人的資本と捉え、その存在を重要視している。さらに、教師と高齢者が協力することによって、学校におけるソーシャル・キャピタル¹³⁾の増加に貢献できる可能性を述べている

13) 社会関係資本と訳される。社会の信頼関係、ネットワーク等の社会組織の重要性を説く概念。

(Boström, 2011)⁽⁵²⁾。近年は、ソーシャル・キャピタルとしての高齢者の存在を前提に、学校を自然な社会単位の一つとして捉え、「価値についての真の社会的な基準 (Dewey, 1900)⁽⁵³⁾」を基盤とした学校モデルとして Intergenerational School (写真5) が設立されている (Cleveland, Ohio)。ここでは、教育における世代間交流のあり方と意義について、先に述べたエリクソンの **generativity** を各世代や地域を対象に広く発展させた新たな概念である **intergenerativity**¹⁴⁾ を軸に、地域コミュニティ・学習環境・相互作用という点から検討されつつあり (Whitehouse, P., 2000)⁽⁵⁴⁾、世代間交流プログラムにおける教育的役割の新たな展開が期待できる。

子どもと高齢者の相互を主体者として見た幼老統合ケアに関しては、高齢者の多くは何らかのケアを必要とする立場にあること、子どもの場合も幼児が多く、高齢者と同じくケアの対象者である。このケアを受ける立場同士が、お互いの世代を意識し助け合うという「共助の関係性」から、いくつかの教育的意義が考えられる。

江東園やひかりの里の事例から、世代間交流プログラムによる子どもの存在が、高齢者の生活リズムを整え、活性化させること、高齢者自身の役割感や効用感の向上が見られる等の報告がされている。このような報告は他にも多く (例えば、広井 2000⁽⁵⁵⁾、多田 2002⁽⁵⁶⁾)、福祉文化¹⁵⁾ の視点から、高齢者の **well-being** との関連が指摘されている。前述した高齢者の存在が「教育環境」としての役割を担うということと対比させて考えれば、子どもの存在が高齢者にとっての「生活環境」としての役割を担う可



写真5 : Intergenerational School (Cleveland, USA)
造形プログラムから

-
- 14) **intergenerativity** とは、世代間における会話や経験の共有から生じる感情的な融合を意味し、個々の心情、社会生活、世界にベネフィットをもたらす行動であり、全ての世代の人々をつなぐ概念である (George, et al., 2011)⁽⁶²⁾。この概念は集団的英知を構築し、複雑な社会に必要とされる地域活動の活性化を可能にする理論と実践の枠組みである (Davies, et al., 2013)⁽⁶³⁾。
- 15) 福祉文化とは、福祉を軸とした地域づくりであり、誰もが安心して暮らせる社会を目指した概念である。(岩間, 2009)⁽⁶⁴⁾

能性が示されていると考えられる。

幼老統合ケアの対象となる高齢者は、日米共通して認知症の高齢者が多い。認知症の高齢者に関しては、ひかりの里の事例のように、生活にかかわる活動や宿題を一緒に行う等の活動において、特に大きな問題はみられず、高齢者は子どもに対しての指導的な立場に立つこともある。一方、Seagull Schoolに見られる高齢者は、指導的立場に固守せず、同じ立場で交流をもつ姿が見られる。これらの事例から考えられるのが、子どもと高齢者間におけるピア学習の可能性である。Campら(2011)⁽⁵⁷⁾も、モンテッソーリをベースにした活動を世代間交流プログラムに導入した研究において、ポジティブな相互作用をピア学習がもたらすと報告している。つまり、日常生活レベルにおける活動を世代間交流プログラムとして行うことによって、子どもと高齢者相互に教育的な効果もたらされる可能性が示唆されている。

以上、これらの事例研究から、子どもは成長していくために必要な基盤としての「生活形式」¹⁶⁾を高齢者から学び、高齢者は子どもから「存在を肯定」されるという互恵関係が世代間交流プログラムを通して成り立つと考えられる。

7. 総括

世代間交流における教育的意義に関し、日米の歴史的背景を概観し、複数の事例や研究動向を踏まえ整理・検討してきた。これまでに述べてきたことを以下に総括する。

第一に、意図的に世代間交流を仕掛ける世代間交流プログラムの発生は、日米とも1960年代というほぼ同時期に起こり、その背景には少子高齢化と核家族化、都市部への人口集中によるコミュニティ内の交流断絶、人間関係の希薄化という諸問題に対する方策として必要とされたものであった。しかしその当初の方策には違いがあり、米国の場合は高齢者個人の経験をベースとしたかかわりを重視した世代間交流プログラムであり、他方、日本の場合はコミュニティをベースとした文化継承が主体であった。これらは日米における大きな違いであり、世代間交流の教育的意義を考える上で「個人ベース」と「コミュニティベース」という視点が示唆されているといえよう。

第二に、主体者別に3つのプログラム類型に従って事例の整理を行ってきたが、プログラム類型の別にかかわらず、両方の世代とも、世代間交流からベネフィットを得ていた。具体的には、子どもや学生の場合、高齢者の生きてきた歴史からの学びを得ること、学力の向上、学習環境の適正化、社会的価値観、社会的スキル、コミュニ

16) ここで使用している「生活形式」とは、ウィトゲンシュタイン(哲学探求 31, 202, 241)⁽⁶⁵⁾の述べるところの、人の中で生きて作用している「価値・規範」, 「生活の持っている規則」を意味する。(石井, 1998)⁽⁶⁶⁾(丸山, 2000)⁽⁶⁷⁾

ティに対する理解等である。高齢者の場合、社会的孤立感の軽減、新しいスキルの獲得、社会への貢献意欲の充実に伴う自己実現の機会等である。

第三に、日常生活レベルにおける活動を世代間交流プログラムとして行うことによって、子どもと高齢者相互に教育的な効果をもたらされる可能性である。この可能性は幼老統合ケアにおける世代間交流プログラムにおいて、よりはっきりした形で表れており、生活と連関した価値や規範を学ぶことのできる、また伝えることのできる「教育の場」「教材」としての世代間交流の位置づけである。このことは Dewey (1916)⁽⁵⁸⁾ が経験の伝達について述べている「人は共通の点があることによって共同の生活を成し、交流の手段によって共通のものを獲得する～中略～すなわち共同の理解である」に通じ、世代間交流プログラムの根底を成す教育的意義であると考えられる。

8. 課題

これまでの論述から、世代間交流プログラムがもたらす教育的意義が確認できた。そこから導き出された知見は、次の研究課題提示ともとらえられる。

先に見たように、子どもたちにとって高齢者は、＜教育環境＞としての存在であり、その交流は、文化・社会の伝承・創造を含む学びの場となっている。また高齢者にとって子どもたちは、自らの生活にアクセントを与えてくれる＜生活環境＞の一部であり、交流は心身にわたって充実感を与えてくれる。

しかしながら、それらは、一方の＜教育環境＞や＜生活環境＞のみにとどまらず、同時に双方にとっての＜教育環境＞であったり＜生活環境＞であったりする。そうした関係性を豊かに醸し出すには、当事者とともに第三者でかつ当事者の特性を十分に理解・把握しているファシリテーターが必要となる。その役割を担う存在の一つに保育者や教師がある。特に幼児と高齢者とが出会う世代間交流プログラムの推進においては、幼児のみならず、高齢者の特性をも把握できた保育者の指導性が大きく影響すると考えられる。このような高齢者および幼児のケア経験を豊かにもつ保育者養成が本研究から発展する研究課題ととらえている。

— 文 献 —

- (1) カプラン, M. 「世代間プログラム—どの程度深く関与するかの問題」『現代のエスプリ インタージェネレーション』, 至文堂, pp.51-58, 2004
- (2) カプラン, M. 前掲書, 2004
- (3) 草野篤子 「あとがき」『世代間交流学の創造』, あけび書房, p.238, 2010
- (4) 金田利子 「生涯発達理論と世代間交流: 世代間交流の各世代への意義」『世代間交流効果』, 三学出版, pp.181-204, 2009

- (5) 文部科学省 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/sou.htm (2015年4月参照)
- (6) 文部科学省「幼稚園教育要領」, 2008
- (7) 厚生労働省「保育所保育指針」, 2008
- (8) 浅沼由紀『高齢者複合施設』, 市ヶ谷出版社, 2002
- (9) 君島菜菜「高齢者の世代間交流に関する先行研究の現状と交流を分類・整理する枠組の検討」『大正大学大学院研究論集』25, pp.232-246, 2001
- (10) 吉津晶子「幼老統合ケアにおける世代間交流プログラムの開発」, 平成18~20年度科学研究費補助金研究成果報告書, 2009
- (11) New York State Intergenerational Network, “*Good Practices in Intergenerational Programming*”, 2010
- (12) Newman, S., *A History of Intergenerational Programs*, The Haworth Press, Inc., pp.1-16, 1989
- (13) Newman, S., *History and Evolution of Intergenerational Programs, Intergenerational Programs –Past, Present, and Future*, pp.55-79, 1977
- (14) Newman, S., *History and Current Status of the Intergenerational Field, University Center for Social and Urban Research*, pp.2-7, 1995
- (15) Newman, S. 前掲書, 1989
- (16) National & Community Service, *Foster Grandparents –Share Today. Shape Tomorrow–, Operations Handbook*, 2008
- (17) Saltz, R., *Research Evaluation of Foster Grandparent Program, Journal of children in contemporary society, 20(3-4)*, pp.205-216, 1989
- (18) National & Community Service 前掲書, 2008
- (19) Newman, S. 前掲書, 1989
- (20) 岡本包治「失われた対話-世代間の断絶をめぐって」『青少年問題』15(5), pp.6-10, 1968
- (21) 世代間交流に関する調査研究委員会「世代間交流に関する調査研究報告書」, pp.198-213, 1994
- (22) 村山陽「シニアの学校ボランティア活動に注目して」『世代間交流学の創造』, あけび書房, pp.136-148, 2010
- (23) 角間陽子・草野篤子「学校における世代間交流ーアメリカと日本の事例から」『多様化社会をつむぐ世代間交流』, 三学出版, pp.94-106, 2012
- (24) 多湖光宗監修『幼老統合ケア』, 黎明書房, 2006
- (25) 厚生労働省「宅幼老所の取組」, 2013
- (26) National& Community Service, *An Evaluation Report on the Foster Grandparent Program*, 1994
- (27) Teh, L.,& Terry, D., *Fpster Grandparent Program, Journal of Intergenerational Relationships 3(1)*, The Haworth Press, Inc., pp.79-84, 2005
- (28) Glass, T. A., Freedman, M., Carlson, M. C., Hill, J., Frick, K. D., Tielsch, J. M., Wasik, B. A., Zeger, S. & Fried, L. P., *Experience Corps: Design of an Intergenerational Program to Boost Social Capital and Promote the Health of an Aging Society, Journal of Urban Health: Bulletin of the New York Academy of Medicine vol.81(1)*, The New York Academy of Medicine, pp.94-105, 2004
- (29) Rebok, G. W., Carlson, M. C., Glass, T. A., McGill, S., Hill, J., Wasik, B. A., Ialongo N.,

- Frick, K. D., Fried, L. P. & Rasmussen, M. D., Short-Term Impact of Experience Corps[®] Participation on Children and Schools: Results From a Pilot Randomized Trial, *Journal of Urban Health: Bulletin of the New York Academy of Medicine* vol. 81 (1), The New York Academy of Medicine, pp.79-93, 2004
- (30) Glass, et al. 前掲書, 2004
- (31) 藤原佳典「高齢者のプロダクティビティ (productivity) と世代間交流」『世代間交流効果』, 三学出版, pp.59-71, 2009
- (32) 藤原佳典・渡辺直紀・西真理子・李相侖・大場宏美・吉田裕人・佐久間尚子・深谷太郎・小宇佐陽・井上かず子・天野秀紀・内田勇人・角野文彦・新開省二「児童のイメージに影響をおよぼす要因－“REPRINTS” 高齢者ボランティアとの交流頻度の多寡による推移分析から」『日本公衆衛生雑誌』第54巻第9号, 日本公衆衛生学会, pp.615-625, 2007
- (33) 竹内瑠美・村山陽・安永正史・野中久美子・倉岡正高・大場宏美・鈴木宏幸・西真理子・小宇佐陽子・李相侖・藤原佳典「児童のストレスに世代間交流授業がもたらす効果－高齢者ボランティア“りぷりんと”特別プログラムより」『日本世代間交流学会誌』Vol.2 No.1, 日本世代間交流学会, pp.49-56, 2012
- (34) 安永正史・藤原佳典・村山陽・竹内瑠美・大場宏美・野中久美子・鈴木宏幸・西真理子・草野篤子「高齢者ボランティアとの交流授業が児童のソーシャル・サポートにおよぼす影響」『日本世代間交流学会誌』Vol.1 No.1, 日本世代間交流学会, pp.39-46, 2011
- (35) Fujiwara, Y., Sakuma, N., Ohba, H., Nishi, M., Lee, S., Watanabe, N., Kousa, Y., Yoshida, H., Fukaya, T., Yajima, S., Amano H., Kureta, Y., Ishii, K., Uchida, H., & Shinkai, S., REPRINTS: Effects of an Intergenerational Health Promotion Program for older Adults in Japan, *Journal of Intergenerational Relationships* 7(1), The Haworth Press, Inc., pp.17-39, 2009
- (36) 藤原佳典・渡辺直紀・西真理子・大場宏美・李相侖・小宇佐陽子・矢島さとる・吉田裕人・深谷太郎・佐久間尚子・内田勇人・新開省二「高齢者による学校支援ボランティア活動の保護者への波及効果-世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム“REPRINTS”から」『日本公衆衛生雑誌』第57巻第6号, 日本公衆衛生学会, pp.458-466, 2010
- (37) NPO 法人日本世代間交流協会 (JIUA) ・ペンシルバニア州立大学 (PSU) 「米国世代間交流スタディー・ツアー報告書」, 2009
- (38) Yoshida, H., Henkin, N. & Lehrman, P., *Strengthening Intergenerational Bonds in Immigrant and Refugee Communities*, The Intergenerational Center at Temple University, 2013
- (39) New York State Intergenerational Network 前掲書, pp.5-24, 2010
- (40) 杉啓以子「地域再生と行政の転換」『世代間交流学の創造』, あげび書房, pp.86-97, 2010
- (41) 杉啓以子「子どもと高齢者の交流」『現代のエスプリ インタージェネレーション』, 至文堂, pp.73-81, 2004
- (42) 杉啓以子 前掲書, p.78, 2004
- (43) 多湖光宗「世代間交流・支え合い・統合ケアは縦割り制度違反か」『世代間交流学の創造』, あげび書房, pp.98-109, 2010
- (44) 多湖光宗『痴呆老人力を子育てに生かすー三代交流共生住宅相乗効果の実際』, 社会福祉法人自立共生会, 2003
- (45) 多湖光宗「複合施設での幼老統合ケア」『幼老統合ケア』, 黎明書房, pp.46-52, 2006
- (46) Larson, C., Meet Cover Directors, *Child Care Information Exchange* n97, pp.27-28, 1994

- (47) Mendelson, M., Larson, C. E. & Greenwood, H., Intergenerational Shared Sites in Hawaii, *Journal of Intergenerational Relationships* 9(4), The Haworth Press, Inc., pp.445-451, 2011
- (48) 溝邊和成・吉津晶子「アメリカ合衆国ハワイ州 Seagull School (Kapolei 校) の世代間交流活動に見られる教員の支援-実践資料, 保育場面及び指導教員への面接を手がかりに」『日本世代間交流学会誌』Vol.1 No.1, 日本世代間交流学会, pp.109-118, 2011
- (49) Mendelson, et al., 前掲書, 2011
- (50) 溝邊和成・吉津晶子 前掲書, 2011
- (51) アン・クリスティン・ポストロム「スウェーデンの義務教育における世代間交流活動とソーシャル・キャピタル」『多様化社会をつむぐ世代間交流』, 三学出版, pp.1-20, 2012
- (52) Boström, A. K., Lifelong learning in Intergenerational settings: The Development of the Swedish Granddad Program From Project to National Association, *Journal of Intergenerational Relationships* 9(3), The Haworth Press, Inc., pp.293-306, 2011
- (53) ジョン・デューイ (市村尚久 訳)『学校と社会』, 講談社, p.74-75, 1998 (Dewey, J., The School and Society, The University of Chicago Press, 1900)
- (54) Whitehouse, P., Intergenerational Community Schools: A New Practice for a New Time, *Educational Gerontology* 26, pp.761-770, 2000
- (55) 広井良典『老人と子ども 統合ケア』, 中央法規, 2000
- (56) 多田千尋『遊びが育てる世代間交流』, 黎明書房, 2002
- (57) Camp, C. J., Lee, M. M., Montessori-Based Activities as a Transgenerational Interface for Persons With Dementia and Preschool Children, *Journal of Intergenerational Relationships* 9(4), The Haworth Press, Inc. pp.366-373, 2011
- (58) Dewey, J., Democracy and Education, New York The Macmillan Company, p.5, 1916
- (59) Erikson, E. H., Childhood and society, 2nd ed. W. W. Norton, 1963 (仁科弥生 訳『幼児期と社会』, みすず書房, 1980)
- (60) Erikson, E. H. & Erikson, J. M., The life cycle completed, Expanded ed, W. W. Norton, 1997 (村瀬孝雄, 近藤邦夫 訳『ライフサイクルその完結, 増補版』, みすず書房, 2001)
- (61) 一番ヶ瀬康子「幼老統合ケアの意義」『幼老統合ケア』黎明書房, pp.8-11, 2006
- (62) George, D., Whitehouse, C. & Whitehouse, P., A Model of Intergenerativity: How the Intergenerational School is Bringing the Generations Together to Foster Collective Wisdom and Community Health, *Intergenerational Relationships* 9(4), The Haworth Press, Inc., pp.389-404, 2011
- (63) Davies, S. M., Reitmaier, A. B., Smith, L. R. & Mangan-Danckwart, D., Capturing Intergenerativity: The Use of Student Reflective Journals to Identify Learning Within an Undergraduate Course in Gerontological Nursing, *Journal of Nursing Education* vol.52 No.3, pp.139-149, 2013
- (64) 岩間文雄「福祉文化」概念についての一考察, *The Journal of department of Social Welfare, Kansai University of Social Welfare* No.12, pp.199-206, 2009
- (65) ウィトゲンシュタイン『ウィトゲンシュタイン全集 8 哲学探求』, 大修館書店, p.38, 163, 176, 1976
- (66) 石井雅史「生活様式的一致」と「規則の知」『科学哲学』31-1, 日本科学哲学会, pp.69-83, 1998
- (67) 丸山恭司「教育において<他者>とは何か」『教育学研究』第67巻第1号, 日本教育学学会, pp.111-119, 2000

— 倫理的配慮 —

本論において使用した写真は、全て対象者の許可を得て撮影したものであり、論文掲載等に関しての使用許可は、学校および施設代表者から得ている。

— 付 記 —

本論は、熊本学園大学海外事情研究所（海外調査研究費）および科学研究費補助金基盤研究（B）26285176「互恵性に基づく教科準拠型多世代交流プログラムの開発（代表：溝邊和成）」の助成を受けた研究成果の一部である。

— 謝 辞 —

本論を構想するにあたり、岡山大学名誉教授の渡邊満先生より貴重なご示唆を賜りました。ここに衷心より感謝の意を表します。

Research Trends and Issues related to Educational Significance of Intergenerational Programs

Masako YOSHIZU*

Kazushige MIZOBE**

We examined the educational significance in the intergenerational exchange programs of Japan and U.S. seen in recent years.

We found out the character of “individual base” in the program of U.S. and the character of “community base” in the program of Japan on the histories of those programs. In addition, as a result of classifying and analyzing those intergenerational exchange activities by “Elders Serving Youth”, “Youth Serving Elders”, and “Joint/Shared Programs”, the following point became clear.

1. Irrespective of the type of activities, both of generations had got the benefit from intergenerational exchange activities.
2. By treating something of everyday life in an intergenerational exchange program, the educational effect was brought between a child and elderly people.

We recognize that it is necessary to research about the teacher’s role for facilitating those intergenerational exchange programs in the near future.

Key Words: intergenerational programs, educational significance, generativity, social capital